

論文

泉鏡花の女人救済の原型

——『冠弥左衛門』論——

〔抄録〕

「処女作にはその作家のすべてが宿っている」・「作家は処女作へと回帰する」といった言葉が示すように、鏡花の処女作である『冠弥左衛門』にもまた鏡花の原点のようなものが内包されていたのではないだろうか。それは一つは仏教的な要素であり、もう一つは作品内の現実世界では薄幸な女性が、死ぬことで救われ（ある種の）理想郷へと旅立つ要素である。この『冠弥左衛門』には鏡花文学に通底していくその萌芽が見出せるのではないだろう。

はじめに

『冠弥左衛門』は、明治二十五年十月一日から十一月二十日まで京都『日出新聞』に連載された泉鏡花の処女作である。その後、明治二十七年の『北陸新報』に『義民実伝 仏師表徳』と題名を変えて転載された。念のため、少し長くなるが以下に梗概を記しておく。

時は相模守東殿の治世、霊山卯之助の父は、鋭鎌利平という刀鍛冶

うか。その意味でも『冠弥左衛門』はやはり重要な作品であると考えられるし、戯作的な作品であるために駄作であるとも言いきれないものがある。鏡花文学を理解するためにも価値のある重要な作品の一つといえる。

キーワード 泉鏡花、女人救済、仏教、地藏菩薩

だった。十七年前、富豪石村五兵衛は自分の利益のために農民をたぶらかし、長谷八ヶ村の田畑を法外な高値で買い上げようとした時、村民は金に目がくらんでこの申し出に従おうとした。利平は石村の謀略を見破り、村民を強く説得して、石村の計画を覆そうとした。石村は執権の岩永武蔵に取り入り、計画が完遂すれば八ヶ村の農民は自分の小作人となり、思いのままに重税を課することができる。そこからの儲けは山分けにしようと話を持ちかける。こうして石村は岩永の手を借

りて利平を死罪へと追い込み、そのため妻の渚は自殺する。この間に生まれたのが卯之助だった。

この卯之助と両思いの小萩のもとに、石村の使者がやって来る。石村の息子である次郎藏の嫁に小萩を指名したのだった。小萩親子は、来合わせていた権五郎組の親分である俠客の猿の伝次の力添えで、難題を退けたものの後が心配で生きた心地もしなかった。そこへ相模守の側近である沖野新十郎の妻阿浪が訪れる。石村の息子にというのは建前で実は、岩永自身が小萩に執心なのだと告げ、仲人を務めようと申し出る。小萩親子は遂方に暮れてしまう。阿浪は親子に同情し、自分の屋敷へ匿って救おうと約束する。

二十十日は稀に見る暴風雨で、稲はほぼ壊滅した。さらに、石村の重税が重なったことで遂に農民は蜂起することを計画する。この蜂起のリーダーが卯之助と伝次だった。卯之助は自身の宿としている高妙寺を集合場所とした。だが、この計画は長谷の名主の報告によって、石村たちに知られてしまう。卯之助たちは寺へと立てこもり、岩永たちと山門をはさんで対峙した時、山門の楼上にいた冠弥左衛門の巧みな話術によって、事態は穏便に治まった。未遂に終わった蜂起は石村を激怒させた。そこで、農民たちに石村邸の周りに壕を掘らせるという重役を課す。一方、相模守東殿を暗殺することをも画策する。この石村たちの密談を小萩は立ち聞かす。小萩は沖野夫婦にそのことを告げる。沖野は小萩に岩永暗殺を依頼する。そこで、小萩は岩永へ嫁ぐことを承諾する。しかし、岩永暗殺は失敗に終わり、沖野も捕縛され幽閉されてしまう。

石村たちの悪政が布かれる中、卯之助たちは再度蜂起の機会を窺っていた。願望成就のためには、弥左衛門にリーダーになってもらう必要があると考えた二人は、弥左衛門のもとへ向かい彼を説得する。一方、阿浪は新十郎と会い、彼の自害を見届けるが、岩永の腹心である中村大六に見つかり、追われる身となる。遂に阿浪は捕まり、想像を絶する拷問を受けて死んでいく。

岩永は石橋亭で酒宴を催していた。卯之助も女装をして亭に紛れ込み、様子を窺っていた。そこに、立ち上がった弥左衛門の爆裂弾によって岩永は追いつめられる。捕らえられた岩永は卯之助によって滅ぼされた。

さて、この作品の先行研究を概観すると、作品の内容分析に踏み込んで論じているものは少ない。これは柳田泉氏による「面白くない小説」、「恐ろしくマズい」小説という指摘に端を発していると考えられる。ただ、柳田氏はこの作品が「鏡花流に戯作文学化」したもので、弥左衛門を仏師としたところにおもしろさがあり、注意して読まれるべきであるとしている。^①この戯作文学という点に注目して近世文学とのつながりから作品を論じているのが高田瑞穂氏、小池正胤氏、弦巻克二氏、秋山稔氏の四氏である。高田氏はこの作品が「誠に古風な、馬琴の影響を当然考へてい、勸善懲惡の物語」であることを特徴の一つとして挙げている。^②小池氏の場合は、鏡花が「草双紙」を耽読していたことを指摘し、高田氏と同様に馬琴の影響を論じている。その中でも『冠弥左衛門』には『近世説美少年録』の続編である『新局玉石童子訓』の影響が強いことを挙げている。^③次に弦巻氏は、この作品

には鏡花文学の真髓や小説観が最初から孕まれていたのではないかという疑問から出発し、それを近世文学との連続から展望しようとしている。冠弥左衛門という「救済者」の人物造型が、鏡花の神秘的 세계への信仰を垣間見せているとし、近世文学で超自然的なものが扱われることとの関わりを指摘している。⁽⁴⁾ 秋山氏も「馬琴を中心とした前代文学の継承をたど」ろうとし、作品における卯之助と弥左衛門の意味の重要性を説く。氏によれば、卯之助は「美の体現者」、弥左衛門は「美の創出者」であり、「叛骨精神によって非道な権力者に反抗し討伐する、美的世界の実現」の物語としての読みを提示する。⁽⁵⁾

また、『冠弥左衛門』が書かれた当時の時代背景及び作品内における時代背景に焦点を当てた論や、作品の掲載・転載理由について考察しているものもある。時代背景に注目している論者としては、先程の秋山氏、谷川恵一氏、大野隆之氏、西田谷洋氏が挙げられる。この『冠弥左衛門』という作品は、明治十一年十月二十六日に実際に起こった真土事件が下敷きとなっていることを、秋山氏や先述の柳田氏は指摘している。⁽⁶⁾ 秋山氏は当時この事件が新聞でも大々的に取り上げられたことを指摘し、事件を基に書かれた続き物の一つである武田交来⁽⁷⁾の『冠松真土夜暴動』が典拠であると考察している。⁽⁷⁾ 続いて谷川氏は秋山氏の論をふまえながら、必ずしも作品の内容に真土事件そのものが描かれているわけではないとして、秩父事件や加波山事件を取り込んでいるとしている。そして、自由党左派や秩父困民党による蜂起を描いた「自由民権政治小説」として作品を解釈している。⁽⁸⁾ 大野氏の場合は、鏡花作品における反骨心をもった民衆が、偽善者を裁こうと

する作品を「イデオロギイ小説」と仮称し、『冠弥左衛門』、『蛇くひ』、『貧民倶楽部』を論じている。『冠弥左衛門』については、明治初期の事件が江戸時代を舞台として展開していることの意義を指摘している。それは、反国家的イデオロギーが農民蜂起のうちに隠され、事件自体が明治国家に抵触しない江戸時代へと追いやられてしまったことである。それによって、『冠弥左衛門』における「対国家的反抗」は「二重に終わっ」てしまっているとする。⁽⁹⁾ 西田谷氏は「先行する民権文学から鏡花文学への影響・変換」を問題点として出発し、『冠弥左衛門』は「民権文学では読本の伝統を受け継いだテキスト」と解釈する。それは特に宮崎夢柳の「虚無党文学をその表現に取り込んだ作品」であると評価する。また、夢柳たちの民権文学と鏡花の作品は、断絶ではなく連続していると捉えなければならぬと指摘している。⁽¹⁰⁾

作品の掲載・転載理由について考察しているものとしては、工藤雅規氏、先述の弦巻氏、関肇氏の三氏である。工藤氏は巖谷小波の『壬辰日録』を取り上げ、その側面から作品連載の事情や背景を明らかにしている。⁽¹¹⁾ 弦巻氏は『日出新聞』連載時には好評であった『冠弥左衛門』が、なぜ『北陸新報』転載時には好評だったのかについて考察している。氏は歴史小説の流行、都会と地方の文化差と共に「表題の変更が深く関与していた」可能性を論じている。⁽¹²⁾ 関氏の場合は、『日出新聞』連載時の事情を考察することで、鏡花の文学的出発の意味を追究し、京都の新聞ジャーナリズム・政治・経済・文化の様相を明らかにしようとしている。その中で、明治二十年代半ばになってから義侠心に富む人物造型は再発見され、改めて人々の関心を引きつつあった

ことを明らかにしている。そこで、『冠弥左衛門』に対する評価としては、「崩壊した社会秩序を権力に成り代わって弱者と連帯して回復していく〈侠〉の物語」として提示している。その侠の問題が、鏡花文学の全体を貫く主要なモチーフの一つとして追求されていくことに触れている。結論として氏は、新聞メディアをデビューの場として出発したことは、社会的弱者へのまなざしをもって文学活動を展開していくことになる鏡花の「原点」として、見直されるべきであるとす⁽¹³⁾る。

作品の内容分析に踏み込んで論じているものとしては、まず、奈良崎英穂氏の論が挙げられるだろう。氏は、作品における語りに注目し、作品内に登場する「作者」が何らかの符号により本文から区別される形で顔を出すことを指摘する。また、同時進行を装いながら作品内に半実体化する語り手の出現によって、内容の時間を過去へと戻し、語りの現在時をその裡に隠していることも指摘している。⁽¹⁴⁾ 加田謙一郎氏は冠弥左衛門の人物造型が、『観音経』における「王難の文」を基として作られ、観音菩薩の影響があることを指摘する。「王命に背」いて蜂起する農民たちを救おうと決意する冠弥左衛門には、王難にあった革命児を救う観音のイメージが背負わされており、「主人公を通して、観音による救済を描こうとしたもの」との読みを提示する。⁽¹⁵⁾ 村上栄子氏は鏡花の「復古趣味的な絵草紙的世界」について考察し、初期作品に見られる「絵草紙的な世界」の中にある「新しさ」が、「幻想世界」の導入によってもたらされたことを指摘する。そのことによつて、特殊な鏡花文学というものを形作っていると論じる。『冠弥左衛

門』についての指摘は、「阿浪の人物造型」と「窮民一揆のモチーフ」である。「阿浪の人物造型」については、意地と張りのある鏡花の理想とした女性像が見られるとし、「窮民一揆のモチーフ」については、疎外され、差別されたものへの共感と偏愛が見て取れるとしている。この二つが後の鏡花作品のテーマとなっていくと言うにとどま⁽¹⁶⁾っている。角田旅人氏は冠弥左衛門には、「観音の力の化身」として登場していることを論じ、作品の基本構図が「神・仏・儒の教えを柱とし、仏の力を称揚する形で組み立てられている」と考察している。⁽¹⁷⁾

ここで一度、先行研究をまとめてみると、第一は、『冠弥左衛門』という作品を近世文学との関わりで論じているものが挙げられるだろう。第二に、同時代における歴史的考察や当時の時代背景についての指摘が挙げられる。第三としては、作品の掲載・転載に関する指摘が挙げられる。以上、この三点が『冠弥左衛門』における先行研究の大きな流れであると考えられる。⁽¹⁸⁾

さて、この作品は先程も触れたように作品内容に踏み込んだ論は少ない。鏡花文学を考える上で仏教は重要な要素であると考えられるが、⁽¹⁹⁾ そのことに関する指摘も少ない。加田氏は冠弥左衛門の人物造型に『観音経』が影響していることを指摘しているが、鏡花文学における仏教はそれだけではないだろう。角田氏もまた「観音」の影響について論じ、「仏の力を称揚」していることにふれているが、そこま⁽²⁰⁾でにとどまっておらず、深い考察には至っていない。「処女作にはその作家のすべてが宿っている」・「作家は処女作へと回帰する」といった言葉が存在する。それは俗説ではあるだろう。しかし、処女作が鏡花文学

における起点であることは間違いないだろう。そこで本発表では作品内に登場する作者の言に注目し、『冠弥左衛門』という作品は阿浪が地藏菩薩へと転生し救済される物語であると同時に、救済する存在へと変化する物語であることを明らかにし、鏡花と仏教の関係ひいてはその後の鏡花文学に通底している現世では薄倖の女性が、死ぬことによって転生し異界に招かれ、救済されるという女人救済についてもふれてみたい。例えば、のちに『女仙前記』『きぬぐ川』における女性、『葉草取』における花売り娘、『海神別荘』で生け贄として公子の妻となる女性などとして表されているものである。このような薄倖の女性の救済の原型が、すでに『冠弥左衛門』の阿浪にも表現されているのではないだろうか。以下、そのことについて考察してみたい。

一、地藏菩薩と地藏信仰

さて、先程ふれたように『冠弥左衛門』は、阿浪が地藏菩薩へと転生し救済される物語なのではないかとの仮説を立てた。そこでまず、この節では地藏菩薩や地藏信仰が、どのようなものであるのかを念のため確認しておきたい。

では、地藏菩薩とはどのような仏なのか。地藏菩薩の起源は、インドのバラモン教の神話に出てくる大地の女神プリティヴィで、大地を擬人化したものと言われている。この神は、大地を守護し、財を蓄え、病を治すといった利益信仰があった。このような思想が仏教にも取り入れられて、地藏菩薩は成立したと考えられている。地藏菩薩は、釈尊が入滅してから弥勒菩薩が成仏するまでの、悪世の無仏時代の救済

を釈尊から委ねられ、六道輪廻の衆生を救済するまでは自らは成仏しないという誓願を立てたとされている。經典としては、『地藏菩薩本願經』・『大乘大集地藏十輪經』・『占察善惡業報經』の三つ經典が地藏三經と呼ばれ、中心となっている。ただ、『占察善惡業報經』は偽經とも言われている。日本の民間信仰に溶け込んだ地藏信仰は、祈願目的や利益内容によって多彩である。代受苦信仰や蔵が子宮の意味を含むことから地母的な性格が内包されており、土地の豊穡、女人安産、長寿延命もある。さらにそこから派生して、女人往生、子どもの庇護も特徴として挙げられる。また、閻魔大王の本地仏としての信仰もあり、幽明の境に住む鬼神としての性格も与えられ信仰されている。そのため、墓地の入口や火葬場、辻に祀られ道祖神と習合されることもある。²⁰⁾

以上、簡単ではあるが、地藏菩薩と地藏信仰の概略を示した。ここで興味深く注目すべきことは、『地藏菩薩本願經』に出てくる女性が地藏菩薩の前世の姿であるということである。²¹⁾ 中心となっている地藏三經の一經典である『地藏菩薩本願經』に、地藏菩薩の前世が女性であったと記されていることは大変重要な意味をもつだろう。このことは後に詳しくふれるが、阿浪のことと深く関わるようになってくる。また、渡浩一氏は地藏菩薩について、火印地藏や頬焼地藏の説話を紹介し、貧しくとも心優しい信心深い若い女性を主人公とすることで、最も鮮烈に、最も力強く、「地藏の大悲による女人救済の功德」を説いていると指摘している。そして、「女人救済は地藏信仰の不可欠の要素」であり、「地藏菩薩」が多くの仏や菩薩の中でも「女人救済に

とりわけ深く関わる菩薩の一つ」であると論じている。⁽²²⁾ 説話の中の地蔵菩薩についての考察であるが、地蔵菩薩が女人救済に深く関わりとする渡氏（ワタジ）の指摘は示唆に富んだものである。星野俊英氏も同様に、地蔵の慈悲の特徴として世の中の気の毒な者の中でもか弱い者ほど、より一層の慈悲を施すと論じている。⁽²³⁾ つまり、男性よりも女性を救い、大人よりも子どもを救うのである。

以上、ここまで見てきたように、地蔵菩薩には様々な利益があるが、その中でも女人救済というものが一つの大きな利益となっているように考えられる。では、これまでのことをふまえた上で次節では、阿浪が地蔵菩薩へと転生し救済されることを考察する。

二、阿浪の地蔵菩薩への転生と救済

さて、この節では先程指摘したように、阿浪が地蔵菩薩へと転生し救済され、また、救済する存在へと変化することを考察する。まずは、この作品内では注目すべき箇所がある。それが以下、引用する箇所である。

此時阿浪が流せる血液、草に塗れ土に染みて雨に洗はれず、風にも消えず、陰々として雨降る夜は、燐火に永き怨を残せり。されば事件の終りて後、此地蔵を建直して末世にお浪を記念のため、地蔵の腰に赤き布を纏ひて、義烈の勇婦が死様に形どれり。月替り星移りて、堂を拵へ賽銭を募るに及び、布にてはとて紅絹に替へたり。俗に棍地蔵と称す。功力広大無辺にて、癩氣、寸白、髪

が濃くなる、皮膚が細になる、軼あか切が癒つて安産に最も好と、見事に薬の効能書に拝まれて、此婦知る者少なし。十月十日が縁日、野良出合の男女手を引きて参詣引きも切らず、聞けば無理な縁も結んで下さる。好事の者次手あらば拝むべし。死出の松、替つて浪木の松といふ。蓋し名に因めるを、後世誤り伝へて、案内者の曰く、寛永年間海嘯の時、此まで浪が来ましたとさ。今は唯並木の松。(三十四 傍線は引用者)

この引用文以前にも、二十九節で二字下げにして「○黒幕切り落して作者申上げます。」と書かれている部分がある。このように、作品の後半から突然作者が作品内に登場し、作品内の状況を説明するようになる。この引用文においても同様に二字下げにして書かれており、作者の説明部分であると考えられる。⁽²⁴⁾ さらに、引用文は特に作品の進行には影響しない説明である。つまり、必要のない文章であるにもかかわらず、作者がわざわざ説明書きを入れていると考えられる。作者が物語の進行に必要な文章を入れるのだろうか。必要がないと考えられるにもかかわらず、挿入しているということは重要な要素なのではないだろうか。引用文の直前の内容は、阿浪が情け容赦ない拷問を受けて、壮絶な死を遂げる場面である。村上氏も指摘していたように、阿浪は鏡花好みの男勝りで気風の良い女性として造型されているために、⁽²⁵⁾ 鏡花の阿浪に対する愛といったようなものから、内容の進行からは無駄と考えられる阿浪の後日談を挿入したといった解釈も当然あるだろう。だが、阿浪に対する愛情とするなら救済と考えたほうが

良いのではないだろうか。だからこそ、物語の進行とは無関係な挿入を行ったのではないだろうか。それはつまり、阿浪が地藏菩薩へと転生し救済され、救済する存在へと変化していることを表現しているのではないだろうか。ひいては鏡花の仏教観を表現しているものであり、後の鏡花文学に表れる異界による女性救済へとつながる始点となっていると言えるのではないだろうか。

具体的に引用文を見てみると、まず「血液」が「草に塗れ土に染みて雨に洗はれず、風にも消えず」とある。これは物理的に血が土に染み込んでいくために消えないということを表現しているだけではなく、当然「怨」の強さを表していると考えられる。だが、それだけではなく、一節の地藏菩薩の箇所でも確認したように地藏は元来、大地の神であったことを考えると、阿浪が地藏として転生するために必要な要素（装置）だったのではないだろうか。事実、事件後に「お浪」の「記念」のために「義烈の勇婦が死様に形ど」った布が用意される。時代が下って、赤い布が紅絹に替わり、「梶地藏」と呼ばれるようになる。阿浪の象徴であった赤い布が替えられ「地藏」と呼ばれることは、阿浪が地藏として転生したことを表しているのではないか。また、地藏は先述したように大地の神なのだが、正確には地母神である。つまり、女性なのである。当然阿浪は女性である。これは単なる偶然ではないのではないだろうか。さらに、これも先に指摘したことだが、『地藏菩薩本願経』に出てくる女性が地藏菩薩の前世の姿であった。地藏菩薩が女人救済も行うことは指摘した。地藏菩薩と女性が深く関わることを考えれば、この作品における阿浪と地藏との関係もやはり、

ただの偶然とは言い切れないだろう。阿浪は死の直前地藏の石仏を抱いて絶命することも考慮すべきだろう。やはり、阿浪と地藏は深く関わっていると考えるべきである。

さらに、唐突にこの地藏は様々な利益を人々に与え始めることもその一つなのではないだろうか。非業の死を遂げた者、さらに女性であった阿浪が救済され、新たに地藏として転生したからこそ人々に利益を与え始めたのではないだろうか。当然、地藏として利益を与えるのは救済する存在ともなったことを意味するだろう。「無理な縁も結」ぼうとすることは生前、新十郎を救い出すこともできず最後まで添い遂げられなかった阿浪の想いが込められているためだろう。このことも阿浪が地藏菩薩へと転生し、救済する存在となっていることの証左となる。また、「此婦知る者少なし。」や「名に因めるを、後世誤り伝へ」られているという表現から、阿浪の存在はもはや人々の記憶から忘れ去られようとしている。それほどの月日が経ったことを思わせる表現である。人々の記憶から阿浪の身に起こったことが忘れ去られようとしているほどに月日が経ったわけだが、地藏の利益が失われることはない。むしろ、その利益は増しているようにさえ見える。なぜなら、この地藏は「無理な縁」さえ結ぶことができるためである。これは生前、阿浪が新十郎と最後まで添い遂げることができなかったためとは考えられないだろうか。だからこそ、そのような無理な要求ともいえることでも叶えようとするのではないだろうか。この表現からも阿浪が地藏菩薩へと転生し、救済する存在となったことが窺えると考えられる。阿波は「功力広大無辺」で、「癪氣」等のあらゆる問題を

解決してくれる救済する存在へと変化したのである。

また、三十五節で阿波の死後、拷問を行った六右衛門が小坪の帰途、「異様な四足」の「恐しき物」を見たと言い、寝込み、発熱し、自分は「地獄」へ堕ちると語る。この「異様な四足」の「恐しき物」は阿波の愛犬「魔佗羅」のことである。この「魔佗羅」によって、六右衛門は恐怖に駆られ、追い詰められることになる。これは、阿波の死によって敵に復讐が行われたと言えないだろうか。さらに、四十節で阿波の頭の中に隠し入っていた「東の殿の密書」を「魔佗羅」によって卯之助の下へと届けられる記述があり、岩永への復讐が有利に進められる。このように見てみると、阿波の死の怨みによって、復讐が完遂される後押しがあったと見ることが出来るのではないだろうか。

ここで、桜井徳太郎氏の地蔵信仰についての論を取り上げてみたい。氏は地蔵信仰について興味深い指摘をしている。氏は「遊び地蔵」の伝承を取り上げ、そのような仏教に基づく地蔵信仰が、なぜ地域社会に受容され、在来の土着信仰とどのように結びついたのかを明らかにしようと試みている。「遊び地蔵」とは「地蔵遊び」とも呼ばれるが、中心に一人の子どもを置いて、その周囲をぐるぐると廻るものである。その際に、輪となった子どもたちが様々なことを唱えるのである。よく知られているもので言えば、「かごめかごめ」の遊びである。実はこの「遊び地蔵」は現在では遊戯と化しているが、本来は「神の託宣」を求めた「古代の神事」であったと考察している。桜井氏によれば、「遊び地蔵」は輪の中心に入れられ、目隠しをする子どもは地蔵に見立てて遊ぶのであるが、それは明らかに中心にいる子どもを寄坐

として地蔵を憑依させて、神託を伺う行為であるとする。「遊び地蔵」を宗教的行事として行う場合、輪の中心にいる子どもは概ね「少女」であり、「地蔵の像」を同時に入れて開始する。行事に参加する場合は、悉く「女性」であり、中心的役割を果たしているのが「成人の婦人層」であるとしている。²⁷⁾以上のことは大変重要な指摘であると考えられる。第一に、やはり女性と地蔵は切っても切れない関係にあると考えられる。第二に、興味深いことであるが、地蔵は人に憑依させることができる点である。地蔵は六道の衆生を救済することを目的としている。人に憑依するということは当然、形はどうあれこの人間界にも現れているということになる。地蔵が「託宣」を行うことを考えれば、それは我々衆生を救おうとして同じことと言えないだろうか。そうであるなら、地蔵が人に憑依するという行為は、同時に阿浪を地蔵が救済し、救済する存在に変化させていることの傍証になるのではないだろう。

以上、考察してきたように、『冠弥左衛門』は阿浪が地蔵菩薩へと転生し救済され、救済する存在となる物語であると解釈することができると考えられる。その理由をまとめてみると、第一に、地蔵菩薩の本来の姿が大地母神であるためである。第二に、地蔵菩薩の前世が女性であったためである。そして第三に、地蔵菩薩は女人救済と深く関わっているためである。さらに第四としては、地蔵菩薩は少女に憑依するためである。繰り返しになるが、このように地蔵菩薩は女性と深く関わっている仏である。作品内でも阿浪という女性と関わり、無残な死に至ったためにそれを救済し、救済する存在へと変化させようと

したのではないだろうか。そこには当然、鏡花の阿浪に対する想いもあっただろう。と同時に、鏡花文学に通底することになる薄幸な女性が、死ぬことでしか幸せになることができないというものの原型がここでは見出せる。

おわりに

「処女作にはその作家のすべてが宿っている」・「作家は処女作へと回帰する」といった言葉が示すように、鏡花の処女作である『冠弥左衛門』にもまた鏡花の原点のようなものが内包されていたのではないだろうか。それは一つは仏教的な要素であり、もう一つは作品内の現実世界では薄幸な女性が、死ぬことで救われ（ある種の）理想郷へと旅立つ要素である。それは場合によっては、魔性の存在として姿形を変えて生きながらえるといったものになるわけであるが、いずれにしても、どちらの要素も女性を救済し、場合によっては救済する存在となる点では変わりはない。この『冠弥左衛門』には鏡花文学に通底していくものの、その萌芽が見出せるのではないだろうか。これまで考察してきたように、阿浪は地藏菩薩へと転生（仏教的要素）し、救済され（異界への旅立ち）、救済する存在へと変化したためである。その意味でも『冠弥左衛門』はやはり重要な作品であると考えられるし、戯作的な作品であるために駄作であるとも言い切れないものがあるだろう。鏡花文学を理解するためにも価値のある重要な作品の一つといえるだろう。

〔注〕

- (1) 柳田泉「鏡花の読み初め」(『国文学 解釈と鑑賞』「特輯―泉鏡花の研究」第二巻第九号(第十六号) 一九三七(昭和十二)年九月一日)。
- (2) 高田瑞穂「冠弥左衛門」(『国文学 解釈と鑑賞』「鏡花作品梗概と鑑賞」第十四巻第五号(第一五六号) 一九四九(昭和二十四)年五月一日)。
- (3) 小池正胤「泉鏡花——『冠弥左衛門』と『新局玉石童子訓』」(『国文学 解釈と鑑賞』第四十四巻十三号 一九七九(昭和五十四)年十二月一日)。
- (4) 弦巻克二「鏡花の処女作『冠弥左衛門』——近世文学からの覬望——」(『光華女子大学研究紀要』第二十集 一九八二(昭和五十七)年十二月十日)。
- (5) 秋山稔「『冠弥左衛門』考——泉鏡花の出発——」(『国語と国文学』第六十巻第四号(第七二二号) 一九八三(昭和五十八)年四月一日)及び「泉鏡花の処女作『冠弥左衛門』と真土騒動」(『神奈川近代文学館』第一二二二号 二〇一三(平成二十五)年十月十五日)。
- (6) 前掲注(5)の秋山論文及び前掲注(1)の柳田論文。
- (7) 前掲注(5)。
- (8) 谷川恵一「『冠弥左衛門』における一揆のイメージ」(『文学』第五十一巻第六号 一九八三(昭和五十八)年六月十日)。
- (9) 大野隆之「泉鏡花 イデオロギイ小説の系譜 1」(『論樹』第六号 一九九二(平成四)年九月三十日)。
- (10) 西田谷洋「『民権文学から鏡花文学へ』(『イミタチオ』第二十一号 一九九三(平成五)年五月三十一日)。
- (11) 工藤雅規「『冠弥左衛門』連載の周辺——『壬辰日録』から見た側面——」(『日本文学研究』第十八号 一九七九(昭和五十四)年一月二十日)。
- (12) 弦巻克二「『冠弥左衛門』転載の謎」(『光華女子大学研究紀要』第二

- 十二集 一九八四（昭和五十九）年十二月一日。
- (13) 関肇「泉鏡花の出版と『日出新聞』——『冠弥左衛門』をめぐる——」（『京都と文学——京都光華女子大学公開講座——』和泉書院二〇〇五（平成）年三月二十八日初版第一刷発行）。
- (14) 奈良崎英穂「『冠弥左衛門』論——作者と語り手を中心に——」（『日本文芸学』第二十九号 一九九二（平成四）年十一月十五日）及び「『冠弥左衛門』の語りと時間」（『日本文芸研究』第四十四巻第四号 一九九三（平成五）年一月十日）。
- (15) 加田謙一郎「『冠弥左衛門』の人物造型と観音信仰について」（『成城国文学』第十号 一九九四（平成六）年三月二十三日）。
- (16) 村上栄子「幻想文学にとって美とは何か——泉鏡花の場合——」（『かながわ高校国語の研究』第三十集 一九九四（平成六）年十月十四日）。
- (17) 角田旅人「『冠弥左衛門』覚書き——『物語の物語』断章——」（『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』創刊号 二〇〇三（平成十五）年三月三十一日）。
- (18) その他、鍋木清方と鏡花の交流から、作家と挿絵及び挿絵画家との関係を考察している吉田昌志氏の「泉鏡花と挿絵画家——鍋木清方（一）——」（『論集 泉鏡花』第二集 和泉書院 一九九九年（平成十一年）十月十日初版第一刷）がある。『冠弥左衛門』の挿絵について、氏は「伝奇性をよく伝え」ており、「作品自体の素材内容に見合っている分だけ、清新さを欠く」ものとしてふれている。また、『冠弥左衛門』の単行本が関西で出版された「挿話」について紹介している斉藤昌三氏の「鏡花氏の処女作」（『愛書趣味』創刊号 一九二五（大正十四）年十月二十六日）、対談形式による鏡花の初版本の紹介をしている川島幸希氏の「初版本講義① 泉鏡花の巻」（『日本古書通信』第六十六巻第十号（第八六七号）二〇〇一（平成十三）年十月十五日）がある。
- (19) 泉鏡花と仏教との関係がこれまで深く論じられてこなかったことについては、以前指摘したことがある。拙稿「泉鏡花『五大力』論——毘沙門・不動二仏の救済——」（『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四十四号 二〇一六（平成二十八）年三月一日）。鏡花文学において仏教が重要な要素であることは間違いない。鏡花文学の解明のためにも、今後も追究していかなければならない問題だろう。
- (20) 地蔵菩薩及び地蔵信仰については、塩入亮乗「地蔵菩薩」（『大法輪』「特集〈仏さま〉がわかる事典」第七十一巻三号 二〇〇四（平成十六）年三月一日）、鈴木雅子「地蔵菩薩の研究——地蔵信仰と十王信仰——」（『龍谷大学大学院研究紀要』人文科学 第二十一集 一九九九年（平成十一年）十二月一日）、渡浩一「地蔵菩薩と文芸——地獄の救済者——」（『国文学 解釈と鑑賞』「特集 地獄・極楽の文芸」第五十五巻八号 一九九〇（平成二）年八月一日）、松島健「地蔵菩薩像」（『日本の美術』第三十九号 一九八六（昭和六十一）年四月十五日）、石川純一郎「地蔵信仰と寺社縁起——村落を越えた庶民信仰の問題——」（『国文学 解釈と鑑賞』「寺社縁起の世界 寺社縁起60篇」第四十七巻四号 一九八二（昭和五十七）年四月一日）、等、多数参照させて頂いた。
- (21) 地蔵菩薩の前身譚はいくつかある。例えば、『地蔵菩薩本願経』「切利天宮神通品第一」、「如来讚歎品第六」（『大正新脩大蔵経 第十三卷大集部全』大蔵出版株式会社 一九二四（大正十三）年十一月二十日）等。
- (22) 渡浩一「地蔵菩薩と女人救済——火印（頬焼）地蔵のこと——」（『国文学 解釈と鑑賞』「特集 古典文学にみる女性と仏教」第五十六巻五号 一九九一年（平成三）年五月一日）。
- (23) 星野俊英「佛の中の民主主義者地蔵菩薩——子安地蔵について——」（『大法輪』「特集 佛様の身元調べとご利益」第二十一巻第四号 一九五四（昭和二十九）年四月一日）。
- (24) 前掲注（14）の奈良崎論文において、氏は「後世」「今」「後」と表現されていることに注目し、語られている時間について考察している。
- (25) 前掲注（16）の村上論文。
- (26) 前掲注（4）の弦巻論文において、氏は「鏡花の〈阿浪〉への思いや

り」があることを指摘している。

- (27) 桜井徳太郎「本邦シヤマニズムの変質過程——とくに地藏信仰との習合について——」(『日本歴史』第二六二号 一九七〇(昭和四十五)年三月一日)。今回、氏の論より多大な学恩を賜った。感謝申し上げる。

〔付記〕

本文引用に関しては、岩波書店版『鏡花全集』(昭和六十一年九月から平成元年一月)に拠り、漢字は新字体に改め、ルビは省略した。

(もろおか てつや 文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学)

(指導教員・坂井 健 教授)

二〇一八年九月二十六日受理